

革命から消費革命へ——二〇〇五年の中国大陸流行文化

雷啓立

二〇〇五年の中国大陸における社会文化の変化を観察することは、とても面白いものである。この年の春、中日関係の悪化によって北京、広州、深圳、上海に巻き起こった反日デモ^①に参加し、外に飛び出して騒いだ者たちはすぐに鳴りをひそめた。このデモ行動がホワイトカラーによる春先のピクニックのようなものにならないことを、我々自身は心得ていた。五月になって鳥が舞い草花が萌え立つと、清華園一帯では「芙蓉姐姐」がネット掲示板に溢れ、彼女の妖艶な容姿が大々的に披露された。長沙の街では、「歌いたければすぐ歌おう」の呼び掛けに呼応した歌姫たちがブラウン管を席捲し、「超級女声」オーディションが中国の民主化への道程に大いなる希望をもたらすと、有識者にさえ思い込まれた。② 広大なエンターテインメントの舞台が片付けられる前に、彼女らの美声はその精華を披露し尽くしたようである。歌姫たちが利益を目指して各々飛びたつていっただけでなく、彼女に八〇〇万票をも投じ、四

方八方から長沙に押しかけて自らのアイドルを支持したファン層もまた、「超級女声」と聞くと吐き気がする」ようになっていた。このような状況の変わりようは、魯迅が語った「情勢もまたその変貌が速い」^② 当時と較べるべくもなく、ロック歌手の崔健が十数年前に抱いた「よく分かってるさ、この世の変化が速い」^③ との感慨さえも到底敵わないものとなっている。しかし、こんにち中国国内に住する人々にはもはや、社会の目まぐるしい変貌に動じることはない。叡智ある人々は、計略や欺瞞、搾取といったあらゆる洗礼を受け、資本主義市場教育を経て、早くより榮辱を気に懸けなくなり、よく似た詭計に対し深く悟つたのである——賑やかさを増す文化運動がどれほど素晴らしく見えようとも、その背後には商業利益という二本の「見えざる手」が常に存在することを。それゆえ、悲観主義的に捉えれば、一人の役者が去るとまた新しい役者が現われるかのように社会文化の走馬灯がいかに変幻しようとも、決

して利益や消費の舞台から抜け出すことはできない。かつては消費という命を革めたが、今は消費革命の時代である。実のところこの世は、物寂しく単調な慌しさのなかにあるのだ。

こうして、消費という魔のカーテンを眼前にしながら、二〇〇五年に起こった全ての変化には、常にある一定の規範があった。人々が『上海ベイビー』に代表される「身体創作」に対して刺激が足りないと感じ始めた時、「芙蓉姐姐」の直截的なエロティシズムが人々の視覚に衝撃を与え、大衆の性への想像力が要求する技術的な問題を、インターネットの普及がタイムリーに解決した。レコード会社が装丁する歌手のジャケットに見飽き、「民意」によってアイドルを選出したのも一種の口直しであったが、これによって一般人の平坦な日々に変化が訪れた。「超級女声」のアイドルが喚起したのはまさに、一挙に名声を獲得し、才能を発揮する可能性をあらゆる人が秘めているという「成功神話」であった。「平民アイドル」の誕生はまた、観客を突き動かし、マーケットを活性化する推進力となった。同時にいわゆる「民主」云々の論理も、「平民アイドル」と抱き合わせて売り出されたのである。それは民主にとどまらない。「革命」自体も売られ得るものである。我々の「革命」に対する全ての理解、感情や記憶も含めて、もしも人が買いたがっているのであれば、それを一

まとめに梱包して売るので。文化大革命は禁区であったが、その文革も販売物となる。私も中国大陸で有名な「搜狐」や「卓越」といった検索サイトで実際に見たことがある。文革期の映画は「文革秘密文獻」とネーミングされ、毛沢東が揮毫した「為人民服務」の肩掛カバンや、紅衛兵の腕章、タオル、コップなどが、さほど高くもない値段でサイト上にずらりと列をなす。わずかでも歴史の記憶を有する者はみな覚えているだろう、一九八〇年代では、いかなる文化的言語環境のもとであっても、「文化大革命」は「秘匿された文書」であり、朦朧とした「血塗られた背景」であり、姿が見えない在席者のごとく常に存在していた。文革で蒙った痛みは身体の奥底に沁み着き、拭おうにも拭えなかった。それゆえ、あらゆる言説は全て文化大革命に対して回り道をし、それを避けて通ったものである。個性と自由を主導とする啓蒙的现代思想の潮流の中で、個人と大衆のあらゆる記憶が文革に対して起こす告発や再思考はすべて、イデオロギー国家というメカニズムが「文革」言語に施した統制と禁忌に対し真正面からの決戦を試み、それによって、不可視の文化思想面から可視的な現実面にわたって転覆させる力を有する決定的意義を獲得した。文革に対する言説は、傑出したエリートたちが抵抗と戦闘を繰り広げる重要な領域となった。しかし、文革に対する再思考と、歴史に対する追及は必ずや現実と体制への

疑念を導き出さずにはおかず、啓蒙的言語の転覆性が持つ潜在的な危険性も、文革という名の「魔物」及びその文化形態をソロモンの瓶に封じ込め、その姿を明るみに晒すことはできなかつた。

一九九〇年代以降の中国社会の変化は意外にも、このような言説にまた異なる道程を拓いた。市場経済観念と個々の現実的な利益への深い関心が相互に成長し合い、国家社会に対して有効であつた伝統的イデオロギーの統制力を打ち消してしまつたのである。それとともに現われた理想の不毛、精神の失落のなかで、毛沢東バッジと文革期の遺物をコードとする文化的崇拜物が長江南北にわたり大々的に流行した。北大荒菜館、知青飯店がブームとなり、革命京劇や紅太陽歌曲がヒットした。文化大革命の「革命文化」が、異なる時空背景の中で全く趣を別にする消費的快感と商業利益を誕生、生成させたのである。これに矛盾しつつ追従するかのように、老照片や張愛玲ブームといった三〇年代上海への夢想が立て続けに出現した。歴史と記憶に対する消費が新たな市場と文化産業の原材料となり、文化経済の速やかな発展を牽引すると同時に、伝統的イデオロギーとの合議が新しい消費イデオロギーを潤しながら、この消費イデオロギーを、変化の途上にある中国社会の新たな文化的ヘゲモニーとしたのである。フランスの消費文化理論学者ジャン・ボードリヤールはかつて、マルクスを

援用しながらナポレオン三世の話の評した際にこう述べている。「時に、同様の出来事が歴史上で二度発生する場合がある。一度目は真なる歴史的意義を有する。しかし二度目において、その意義は一種の誇張と笑いの追憶の中のみ存在し、滑稽に、奇妙に変形し——ある種の伝説性に依拠した参照性存在となる」。ネット上に帆布製の紅衛兵カバンや「造反年代」特有のコップやタオルを掲示した時、これらを「結構いいかもしれない」と感じ、全く意味の異なつた「酷」を演出したがる購買主が現われる。こうして、文化大革命は売られてゆくのである。文革に関するあらゆる歴史と記憶は、「酷」さと何ら変わらない。ボードリヤールが述べるように、「文化消費とは、こういった誇張と可笑しさの復興、すでに二度と存在しない事物——すでに消費された「原文…完成し終結した」事物に対して、可笑しきをもつて追憶する時間及び場所として定義される」ものである。よつて、販売者側は「新機軸を打ち出す」ように人民の文革に対する記憶とタブーを「歴史環境に還元」する茶封筒の保存書類袋で「デコレーション」して登場させる。人々に映画を用いて当時の「社会環境」を回顧させ、「あの時代を再び感じ」させ、当時の「政治的雰囲気」を復習させ、当時の人々の「思想観念」や「人間関係」を追体験させ、あの荒れ狂つた年月を経験した人々に「追憶」と反省をもたらすなどという語り口は、単なる

旧派のキャッチフレーズにすぎない。ネット上で文化大革命に関する物品を買い求める人々が手にしたがるのは全く別のコード——「ここは二十一世紀」という標しに他ならない。

文化大革命が終息した三〇年後、伝統的イデオロギーがすでに空洞化したこんにち、「文化大革命」についての討論があるレベルにおいて依然として禁区である一方、「文化大革命」が意味するものは何か、いかに「文化大革命」を再認識すれば正しき思考のありかたとなるのか、消費を「崇高なもの」とみなすのはある種の冒瀆なのではないか——このような問題は中国社会においてすでに時流に適さないものとなり、こういう問題提示方法そのものがすでに消滅したかのようにさえある。先だって、文化大革命博物館の建立をひたすら唱導していた巴金が世を去った⁶。死別の哀しみと彼の榮譽はひととき極みに達した。だがその一方で、「文化大革命」が遙か昔のことであるのは変わらないうが、売ることとはできる、もしかしたらこのような売買こそが文革の落ち着くべき処かもしれない、と真面目に語られるのである。かつて、「革命」的であった中国は最早「消費革命」の中国へと変貌し、似通った商業手段とメカニズムで、すでに一九九〇年代において大規模に「毛沢東」を消費し、『ノーと言え中国』⁷を消費し、魯迅、張愛玲を消費し、『花樣年華』⁸と旧上海、そして『上海ベイ

ビー』を消費し、チェ・ゲバラ⁹を消費し、その上幾度となく知識青年と「文化大革命」を消費し、我々が持つ無残で痛々しい記憶、栄光と苦痛がないまぜになった歴史と文化を消費し尽くした。台北より上海を訪れた陳映真は、繁華街に人が溢れかえり、消費してやまない様子を、そして彼が台湾戒嚴前夜に蔣一族の監獄の中で思いを馳せた社会主義中国が、すでにその影さえ追いつめられないほど渺茫たるものとなった現実を目にした。彼は言う。消費主義とは、根源を辿ればある種の統治術である、と。三〇年前、毛沢東が人民に向けて「革命を徹底的に推し進めよ」と号令をかけた時、すでにこんにちの人々は徹底的に消費することを心に誓っていたのである。

よって、二〇〇五年の中国大陸の流行文化は至って簡潔である。それは一言、消費だ。革命的でない者は穏やかに消費し、革命的なる者は消費革命に邁進する。穏やかで実直な、広く奥深い学識をそなえる中国が行なっていたのがこれほど単純な文化実践であったことを目にすれば、中国の社会主義経験に対して期待を膨らませ、この中に「ワシントン・コンセンサス」¹⁰とは異なる可能性があるべきだと見なしている国際学者たちも、さほど失望することはないだろう。

二〇〇五年十二月三十一日上海にて

原注

（一）二〇〇五年夏、北京大学、清華大学に合格することを人生の目標としていた陝西省の少女、史恒侠は研究生の受験に何度も失敗した後、「冰雪可児」のバンドルネームで北京大、清華大両学のネット掲示板に夥しい数の様々なセルフポートレートを貼り付けた。ルックスこそ平凡であったが、妖艶なポーズをとり、自らを「出水芙蓉」（世紀の女王）に喩えた。ネット上では百万ものアクセス数に達し、一気に絶大なる人気を博す「芙蓉姐姐」となった。中国の新聞や雑誌も彼女を大々的に報道、テレビも彼女をインタビューし、「低俗」か否かの論争が交わされる中、全中国の話題をさらった。

（二）二〇〇五年七月八月、湖南衛星テレビ局が主宰する番組。「歌いたければすぐ歌おう」をスローガンとして、「超級女声」テレビカラオケ選手権が行なわれた。この番組は「出身を問わない」点で親和性を喧伝し、会場での直接対決とPK制でスリリングな雰囲気を出した。「貴女のスターは貴女が決める」を合言葉とする携帯メール投票によって観客の「参加意識」を煽り、極めて高い視聴率を獲得した。その広汎な影響が大きな論争を引き起こし、社会を揺るがすメディア事件となった。また、多くの評論家が「超級女声」のオーディションは事実上「娯楽における民主」であり、中国社会民主実現の大規模なモデルケースとさえ見なした。年末になり、あるウェブサイトが「ネット

超級女声」を開設したが、参加者は寂寥たるものであった。ある観客は「『超女』の二文字を聞くと吐き気がする」と言い捨てた。

訳注

（一）二〇〇五年四月、日本の国連常任理事国入りの動きと、「新しい歴史教科書をつくる会」が編纂する教科書の文部科学省検定通過を契機に、都市圏の大学生を中心に展開されたデモ行動。インターネット上で参集が呼び掛けられたこの運動は「抵制日貨、愛国無罪」をスローガンに激化、日本大使館や日本料理屋、日系企業への破壊行動まで起きた。五月、党中央政府による禁止勧告の後、デモ行動は急激に沈静化した。

（二）魯迅（一八八一—一九三六）が倪朔尔の筆名で記した短評「批評家的批評家」（『申報・自由談』一九三四年一月二一日掲載）の冒頭で用いた語。本短評は『花辺文学』に収められる。

（三）ロック歌手、一九六一—一九八七年にアルバム『新長征路上的揺滾』を発表、中国ロックの先駆者となる。本文はヒット曲「不是不明白」の歌詞の一部。

（四）『上海寶貝』春風文芸出版社、一九九九年。後に「美女作家」と称される作家群の先駆となる衛慧（一九七三—）が発表した小説。描かれる奔放な性描写が風俗を乱すとして翌年五月に発禁、それが逆に衛慧ブームに火を付

け、正規・海賊版合わせて十万部以上が売れた。また本小説は十数カ国語に翻訳された。

(5) Jean Baudrillard, フランス思想家、一九二九—。大量消費時代を迎え、物質を物理的存在としてのみならず、記号として消費してゆく現代社会の構造を分析、『消費社会の神話と構造』(La Societe de Consommation, 1970)を発表して現代社会に大きな影響を与えた。後はシミュレーション論で注目され、湾岸戦争や米国同時多発テロに対して挑戦的な論考を発表した。近年は写真家としても活躍している。

(6) 作家、一九〇四—二〇〇五。三〇年代の「愛情」「激流」三部作により愛と革命の文学者と見なされる。文化大革命中に失脚、後に『随想録』を執筆、文革に対する文学の責任を追及した。二〇〇五年一〇月一七日没。

(7) 『中国可以説不』中華工商聯合出版社、一九九六年。富強大国への実現目標が明示されると共に国内で高まる愛国主義の言論をもとに記された書。作家である張藏蔵を中心として、宋強、湯正宇ら若手ジャーナリストが執筆。同年に日本経済新聞社より日本語版が出版されている。

(8) フランス・香港合作映画、二〇〇〇年。監督は王家衛(ウォン・カーウアイ)、主演は張曼玉(マギー・チャン)、梁朝偉(トニー・レオン)。六〇年代香港を舞台に、配偶者の不倫を知る隣同士の男と女が互いに気持ちを抱めつつ交わす濃密な時間を描いた作品。中国における「婚外情」熱の代表的表象とみなされる。

(9) Guevara Lynch Ernesto Che, キューバ革命指導者、一

九二八—一九六七。詩人・演劇監督張広天の演出による史詩劇『切・格瓦ラ』が二〇〇〇年四月より北京人民芸術院小劇場で公演され人気を博す。これを機に中国ではゲバラブームが起り、映画俳優と並んで『画伝』まで出版された。

(10) 台湾作家、一九三七—。一九五九年より作家活動を始め、六〇年代に文学雑誌『現代文学』に発表した「那麼哀老的眼淚」、「第一件差事」によって作家的地位を築く。一九六六年に共同創刊した『文学季刊』での社会主義リアリズム的創作により、一九六八年から一九七五年まで台湾当局に拘禁される。八〇年代には資本主義の本質に対する内省的考察に富んだ作品を執筆した。

(11) ワシントンの国際経済研究所(IIE)が一九八九年に提起した、アメリカ主導の国際経済秩序構築を目指す共通認識をいう。財政規律、税率引き下げ、課税対象拡大、規制緩和など十項目にわたる。これはアメリカ型の制度を他国に押し付けるものとしてしばしば非難される。世界の長期的な経済効率を高めるか否かについては議論が分かれている。

(邦訳 好並晶)